

【インタビュー】

# 「マジョリティが変わるための報道」を目ざして

情報を活用し、社会をよりよく変えていくために、私たちはメディアや報道をどのように考え、関わっていけばよいのでしょうか。さまざまな現場取材してきたフォトジャーナリストの安田菜津紀さんにお話をききました。



## 安田菜津紀

Natsuki Yasuda

1987年神奈川県生まれ。認定NPO法人Dialogue for People (D4P) 副代表。『写真で伝える仕事—世界の子どもたちと向き合って—』(日本写真企画)、『あなたのルーツを教えてください』(左右社)等の著書。他、テレビやラジオ等に出演。



## 大切にしてきたこと

これまで、東南アジアや中東、アフリカなどの貧困や難民の問題取材してきました。東日本大震災後は、親族がいた陸前高田市を中心に記録を続けています。今、力を入れているのは、日本に逃れてきた難民の人たち、入管の収容所で苦しんでいる人たちなど、日本における外国人や、外国にルーツをもつ人々の人権問題です。

日々の生活に精一杯の人たち、心身ともに傷ついて日本に来る人たちは、自分から声を上げることが難しい状況にあります。元々大きな声をさらに轟<sup>とどろ</sup>かせるのではなく、自ら伝える手段をもたない人たち、置き去りにされがちな人たちの声を伝えたい、常にそう考えてきました。

## 差別に対する気づき

私は中学2年生のときに父親を亡くしました。そして、高校生のとき、父親が在日コリアンだったことを知りました。

自分が「日本人」であることに何の疑いももっていなかった頃は、隣国のことを侮蔑的ニュアンスで報じる番組を見ても、気にも留めません

でした。朝鮮半島情勢が緊迫したときには、日本にある朝鮮学校に数々の嫌がらせが行われましたが、そんな問題にも背を向けていられたのです。在日コリアンへの差別は、まさに自分の父に向けられたものだったのですが、当時の私にとって、差別の痛みは、皮膚の外にあるものでした。私は、日本社会のマジョリティ側にいて、差別に気づかず、生きてこれたのです。

「日本は法治国家だから、差別は防げている」という声も聞かれます。しかし、現に、在日コリアンの人たちや、マイノリティ性をもった人たちの中には、インターネットなどで誹謗中傷や脅迫を受け、生活に支障を来している方もいます。差別は、あなたの目の前になかったとしても、あなたの真横、すぐ背後に存在するかもしれない。そこに、目を向けてほしいのです。

## 社会に参加する若者たち

今、マジョリティ側にいる若い人たちが差別の実態に気づき、それを変えようとする動きがあります。2021年3月6日に名古屋出入国在留管理局で亡くなったウィシュマさん<sup>\*</sup>について、大学生、高校生が声を上げました。彼らは、

<sup>\*</sup>スリランカ人女性ウィシュマ・サンダマリさんは、2017年6月、留学の在留資格で来日した。その後、在留資格を失い、20年8月、名古屋出入国在留管理局に収容され、21年3月に亡くなった。収容中の不適切な処遇や医療体制の不備が指摘され、遺族や支援者が情報開示を求めた。

真相究明のため、情報開示を求めるオンライン署名を行いました。企画した学生は、こうしたことが起こってしまう国の在り方への怒りと同時に、今まで問題に背を向けてきた自分にも怒りを感じたといいます。同級生に外国ルーツの子がいて、これは私の友達の問題なんだと、参加した学生もいました。自分が身近で大切にしていることから、問題をたぐり寄せ、インターネットなども生かして、社会を変えようとしていく若者の姿には、希望を感じます。

当事者がどんなに声を上げて、社会の仕組みやマジョリティの態度が変わらないかぎり、根本的解決にはつながりません。報道などをきっかけに、多くの人が「おかしいよ」と声を上げて初めて、行政や国の重い腰が動くのです。

## マジョリティが変わるために

差別に苦しむ当事者がつらい経験を話してくださるのは、メディアや、それを聞く人に、問題を託すためです。当事者は、「この声を広げてください。この声が世界を変えるきっかけになりますように」と、メディアにバトンを手渡すのです。しかし、メディアが、「当事者だけの問題」として報じてしまうと、いつまでも、その声を「消費」するだけになってしまいます。

ウィシュマさんの取材では、コロナ禍の中、彼女の故郷であるスリランカの実家を訪ね、ご家族や知人の話を聞きました。ニュースとして、彼女がどのように亡くなったのかを伝えるのも大事ですが、それに終始してしまうと、彼女が、悲惨な被害者のシンボルとして「消費」されてしまうだけだと考えたからです。彼女は一人の人間として生きてきた。どのように生きてきたのかが伝わらなければ、命が奪われたという重みも伝え切れない。そう考えての取材でした。

ウィシュマさんのご家族は、つらい現実を突きつけられながら、「人間を人間として扱ってほしい。それを繰り返さないための仕組みを作ってほしい」というメッセージを私たちに伝えてくれました。「人間を人間として扱ってほしい」と誰かに言わせてしまっているのが、私たちの今の社会です。社会を変えていくのは、

バトンを託された私たちなのです。

新著『あなたのルーツを教えてください』では、外国にルーツをもつ多くの人々に取材しました。彼らは、個人の努力で困難を乗り越えてきました。それらを、「美しい話」で終わらせないことが必要です。差別の問題を、マイノリティ個人の努力に矮小化しているからこそ、ウィシュマさんのようなことが起きているのです。マイノリティにがんばらせる社会じゃない社会を目指したい、この本は、そんな投げかけとして書いたものです。

## 情報社会を生きる子どもたちへ

今は、巨大なホースから水（情報）が出ていて、そこに直接口をつけて水を飲みなさいと言われていているような時代だと思います。常に、いいねボタンを押す？ 押さない？ と、立ち位置の表明を求められ、SNSでは、自分が発した言葉に、多くの同意が集まると、それが世界の全てだと錯覚してしまいそうになる。インターネットは、自分の世界を広げてくれているようで、実は狭めているものなのかもしれません。

そんな今だからこそ、立ち止まって考えることが必要だと思います。フェイクニュースではないかな？ リツイートして誰かを傷つけないかな？ と立ち止まり、自分と対話する。SNSで誰かとつながることと同じくらい、「自分との対話」を大切にしてもらいたいと思います。

